

昌平町のみろく踊り

No.369

令和元年7月

このたび、昌平町の「お水かけとみろく踊り」が茂原市文化財に指定されました。今回はこの中の「みろく踊り」について解説してみたいと思います。

右に振って跳ねるようになり進みます。

江戸期から三百年以上続くという新春恒例の行事で、(毎年)一月八日の夕方、稲荷神社の歩射行事として、「みろく踊り」が行われます。歌い手が「めでたいめでたい。おおきにめでたい。この町内を見たてまつる御代こそめでたかりける」、神官役が「かよ(う)に候者は昌平町正一位日具稲荷大明神。火伏せの神にてせうろう」などと口上を唱え、神社から町内へと繰り出します。踊り手は烏帽子に白張姿で採物はなく「めでたいめでたい、おおきにめでたい」と繰り返し唱えながら、両腕を左

県内の「みろく踊り」で有名なものは、千葉県指定無形文化財にもなっている成田市のおどり花見の「ミロク踊り」で、成田の婦人たちが継承しており、揃いの着物に手拭いを肩にして踊りを繰り返しながら、三之宮神社はじめ十六の寺社を回るといいます。歌い手は「みろく踊りの背景となる弥勒信仰とは、弥勒菩薩を本尊とする信仰で、死後、弥勒の住む兜率天へ往生しようとする上生思想と、仏滅後五六億七千万年のち、再び弥勒がこの世に現れ、釈迦の説法にもれた衆生を救うという下生思想の二種の信仰から成ります。みろく踊りはこの下生信仰に基づくもので、本来は五六億七千万先に現れるはずの弥勒菩薩が、世の乱れ

を直すため特別に降りて来てくださったことが「めでたい」と祝うものです。すなわち弥勒を救世主とするメシア思想が背景にあります。北は茨城県鹿島から南は八重山諸島まで散在し、共に海上他界観に根ざしたものです。面白いのは、和歌山県那智勝浦に伝わっていた補陀落渡海の風習で、ミロク船といわれる箱船に僧を閉じこめ、観音浄土を目指し沖に流すものでした。「熊野年代記」には、実際古代から近世までに二十回は行われたと書かれています。このミロク船がたまたま黒潮にのって鹿島に漂着すると、鹿島の人たちは弥勒様が来たと喜び、踊りを踊ったと言われています。こうした踊りがやがて千葉県内にも伝承されたのでしよう。ただし、下総・安房地域に幾つか伝承例はあるものの、上総では昌平町のものが唯一で貴重な民俗であり、継承されることが望まれます。

茂原市文化財審議会委員

菅根 幸裕

文芸コーナー

お母さんありがとう

時女 礼子

母の日に贈り物が届いた

新茶だった

送り主は仕事関係の代理店の女性からだった包みをほぐしてまず先に見た物は

「お母さんありがとう」

の赤いシールだった

箱の中には紫色と抹茶色の

花柄バツケージが並んでいた

母になったことのない私には

初めての経験で嬉しかった

嬉しくて涙がこぼれてきた

直ぐにその代理店に電話をして

素直な気持ちで感謝を伝えた

相手の女性は恥ずかしそうに

笑っただけだったが

何か互いに通じ合うものを感じた

今後も誠意をもって

仕事と向き合うことを自分に誓った

◎選評 斎藤正敏

母の日に届いた知人からの贈り物。母でもない作者にお母さんありがとうの赤いシール。誠意を持って仕事と向きあう心づかいを学んだ日でもあった。

- 偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
 - 投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。
- ※詩の原稿送付先(直接選者)へ 〒297-0032 茂原市東茂原7番地 斎藤正敏宛。
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。

